

デルタに現れたオアシス。鳥や魚、植物  
などの貴重なすみかとなっている

「まだ乾期で、強烈な暑さと砂ぼこりが猛威をふるっています。人間だけでなく、すべての生物の活動は休止状態。いわゆる生物多様性に恵まれた『デルタ』とは、程遠い世界が広がっていました」。調査団長を務める、株式会社アースアンドヒューマンコーポレーションの深井善雄さんは、調査開始時をこう振り返る。

しかし調査を進めるにつれて、デルタのさまざまな姿が見えてきたという。「ある日、デルタの中に水に満ちた『湿地』が現れたんです。ちょっとした地形の凹凸が自然の猛威を優しく包み込み、動植物のオアシスとして存在していた。湿地の再生の可能性を確信した瞬間でした」。

### 住民と動植物に優しい 『オアシス』がキーワード

調査の対象は、ニジェール川内陸デルタ地帯を取り囲むモプチ州モプチ県。国内でも人口増加が著しく、湿地の水や魚などに大きく依存している地域のひとつだ。それ故に彼ら自身も、日々の生活の中で、自然の急速な劣化を実感している。

しかし生きていくためには、湿地に依存せざるを得ない。限られた資源をめぐる、住民同士で摩擦が生じているのが現状だ。今回の調査では、地域住民の自発的な協力・参画を促しながら、湿地資源の「利用」と「再生」

無秩序に行われる農牧業、気候変動による降水量の大幅な減少…。あらゆる要素が重なり合い、破壊のスピードは早まるばかりだ。

この状況を受け、マリ政府は内陸デルタの保全・再生を国家政策に掲げ、法整備や有識者への啓発活動などの取り組みを推進。しかし、県レベルの保全計画は、これまで手つかずのままになっていた。そこでJICAは、

この雄大な自然が住民の手で再生され、人間と自然が共存して生きていく。一日も早く、この国にそんな光景が戻って

のバランスを維持していくことを目指している。

さらに深井さんはこう強調する。「環境保全を前面に訴えてもダメ。まずは住民の目線に立ち、彼らのニーズを十分把握することが大切です」。住民たちの最大の関心事は、豊かな恵みをもたらしてくれる『オアシス』がよみがえることなのだ。

しかし、自然や巨大な乱開発の圧力などが相手だけに、行政や住民の力だけでは限界がある。そこで、深井さんが重要なア

## アフリカの大地に 潤いのある湿地を取り戻そう

地球上でも、貴重な生態系の宝庫となっている“湿地”。  
多様な動植物が息づくこの場所は、  
私たち人間の生活の源にもなっている。  
西アフリカのマリにあるニジェール川内陸デルタもその一つ。  
この場所に自然の恵みを取り戻すべく、JICAの協力がスタートした。

### 西アフリカの 砂漠に現れた湿地帯

西アフリカと聞いて、どのような風景を想像するだろうか。真っ先に思い浮かべるのは、燦々と大地に照り付ける太陽、辺り一面に広がる砂漠。日々の生活用水を何時間もかけてくみにいくという話もよく耳にする。

西アフリカの内陸国マリも、そのイメージが当てはまる。北部に広がるサハラ砂漠は国土の65%を占め、乾期の最高気温は50度以上。国民の大多数が農業に従事するこの国では、その猛烈な暑さが、彼らの生活、生命をも脅かしているのだ。

しかしそんな過酷な状況下で、唯一の『潤い』となっている場所がある。国を横断するニジェール川の内陸デルタ地帯だ。1989年、ラムサール条約にも登録された西アフリカ最大の湿地。この広大な湿地に足を踏み入れると、鳥や魚の群れに出会える。実際、国内に流通する水産資源の約9割が、このデルタ内で獲られたものなのだ。

しかし近年、この内陸デルタの生態系のバランスが崩れつつある。人口増加による土地開発、

クターと考えているのが、湿地をすみかとする『動植物』だ。「水に生息する植物群は魚の繁殖場となり、家畜の飼料にもなる。鳥類は種子を運んで植生回復に貢献し、家畜の尿は土壌を肥沃化させる。このような特徴を効果的に組み合わせ、自然の再生能力を存分に引き出せるような工夫をしていきたい」。

砂漠に砂ぼこりが舞う数キロ先には、鳥が飛び交う楽園が存在する。ニジェール川の内陸デルタ地帯は、昔も今も、人々のオアシスになっている。

この雄大な自然が住民の手で再生され、人間と自然が共存して生きていく。一日も早く、この国にそんな光景が戻って

乾期になると、デルタ内にも砂ぼこりが舞う。視界が遮られ、前に進むことすら困難だ



「昔、デルタは豊かだった。魚はたくさん獲れたし、家畜にやる水や餌にも不自由なかった」と語る住民の言葉を聞き、「彼らはデルタの有用性に気付いている。再生の可能性は十分にあります」という深井さん



たくさんの人でにぎわうニジェール川の船だまり。彼らの生活は、川の向こうに広がるデルタの資源に支えられている